

ナラティブにおけるトピックの導入・維持に関する考察

— 日英言語比較を通して —

梶原 真樹子

キーワード：トピックの導入・維持，名詞句使用における相関，言語の普遍性と固有性

要旨

本稿では日英バイリンガル児童が各言語のナラティブでどのようにトピックを導入・維持するかを焦点を当てる。日英バイリンガル児童が日英両語で物語った「カエルくん，どこにいるの？ (Frog, where are you?)」(Mayer, 1969) の比較を通し，ナラティブでトピックが①初登場，②2番目の登場，③再登場，④継続的登場する際，トピックを表現する名詞句の使用について，日英両語間に相関が見られるかを検証している。使用したデータに①トピックとなる主語は何か，②それがどの名詞句で表現されているか（完全な形の名詞句，代名詞句，主語省略），③その登場順序（初登場，2番目の登場，再登場，継続的登場）の三観点からコードを付加し，統計的分析を行った結果，各登場順序においてトピックを表現する名詞句使用について日英両語間に正の相関が確認された。本稿で得られた結果は，ナラティブでのトピック導入・維持に関する普遍的な法則の存在を示唆している。

1. はじめに

日常生活において他人に情報やメッセージなどを伝える手段は多々存在するが，その一つとして語り，つまりナラティブが挙げられる。そして，ナラティブ内のさまざまな登場人物が起こす連鎖的行動・事件により，ある一定の「話題（トピック）」が生じる。Givón (1983) によると，談話における情報伝達の基本的要素は節であり，節の連鎖がある一つのテーマ，つまり，テーマ的パラグラフを形成する。テーマ

的パラグラフのテーマを構成するものとして登場人物が起こす様々な行動・事件があり，その下位範疇に動作主である登場人物が存在する。よって，Givón (1983) は，談話における「テーマの維持性」は「行動・事件の維持性」を，「行動・事件の維持性」は「(その動作主である) 登場人物の維持性」を支配する，と述べている。本稿では，Givón (1983) 同様，各節・文の主語の位置に置かれ，行動・事件の動作主となる「登場人物」を最上位範疇の「テーマ」と最も結びつきが強いとみなし，ナラティブにおける「登場人物」がナラティブに導入・維持される際に，どのように表現されるかに注目する。例えば，日本語では「太郎 (固有名詞)」，「少年 (一般名詞)」，英語では「Taro」，「The boy」のように登場人物を完全な形の名詞句で表現する場合もあれば，日本語ではまだが英語では代名詞句での表現も見られる。また，英語では文頭的主語が省略できないという文法的制約のためあまり見られないが，日本語では主語省略される場合も多々見られる。

本稿で検証するのは，(1)ナラティブ中でトピックとなる登場人物が導入・維持される際，どのような名詞句を伴い表現されるのか，(2)その導入・維持方法には言語によって異なるのか，それとも普遍的な法則が存在するのか，ということである。なお，ここで述べる名詞句とは完全な形の名詞句，代名詞句，ゼロ名詞句（本稿では主語省略とする）を指す。英語，日本語での名詞句使用の比較を目的とするため，日英バイリンガル児童によって物語られたナラティブを比較する。言語使用には個人差が大きく影響

し、二言語比較を伴う調査は困難であるが、バイリンガル児童を被験者とすることにより、個人差による影響を省くことができ、厳密な意味での二言語比較が可能となる。

2. 先行研究

ナラティブ中のトピック導入・維持方法に関する研究はこれまでもなされてきているが、日本語に関するものとして Hinds (1983) が挙げられよう。具体的には、Hinds (1983) は、日本語母語話者によって物語られた日本昔話「桃太郎」の分析を通して、登場人物が一度言及されてから次に言及されるまでの節の数、つまり「距離」をトピックの維持性の計測基準とし、トピックとなる登場人物がどのような名詞句を伴って表現されているかについて調査した。この調査から推測されるのは、ある登場人物がいったん言及されてから次に言及されるまでに間に入る節が少ないほど、その登場人物はトピック性が高く、ナラティブ中でトピックとして定着しているということである。Hinds (1983) の調査結果によると、最もトピック性が高い登場人物は主語省略となる。次にトピック性が高い登場人物は「完全な形の名詞句+は」で表現され、「完全な形の名詞句+が」はトピック性が低く、ナラティブ中でトピックとして定着していない登場人物の言及のため使用される、ということになる。

Hinds (1983) とは異なる題材を使用しながらも、中浜 (2003) もそれと類似した結果を報告している。中浜 (2003) は英語を母語とする日本語学習者を対象とし、それらの被験者によって物語られた「カエルくん、どこにいるの? (*Frog, where are you?*)」(Mayer, 1969) の分析を通して、それらの被験者のナラティブ中で登場人物を適切な名詞句を伴って導入・維持していく技法の習得を研究した。これらの調査で中浜は比較のため、日本語母語話者が物語ったものの分析も行った。中浜によって収集されたデータからは、日本語母語話者によって物語られたナラティブでは、登場人物を主語の位置

の初めて導入する際には「完全な形の名詞句+が」が使用され、ナラティブの中でトピックとして定着した登場人物を主語の位置に維持する際には「主語省略」の使用が最も多いことがわかった。このように、中浜 (2003) の調査結果は Hinds (1983) の結果と酷似しているのである。

日本語以外の言語でも同様の研究が存在する。Givón (1983) は英語母語話者によるナラティブを分析し、Hinds (1983) 同様、ある登場人物が言及されてから次の言及までの節の数が少ない場合はトピックとして定着しており、登場人物は主語省略もしくは「代名詞句」で表現され、逆に、次の言及までの節の数が多ければ、日本語同様、完全な形の名詞句で表現されると報告している。

上記のように、ナラティブにおけるトピックの導入・維持に関する先行研究は存在するが、こうした研究では、トピックの維持性と使用される名詞句の関係のみが着目されており、登場人物の登場順序は考慮されていない。また、これらの先行研究では、英語のみ、日本語のみといった単一言語でのナラティブに焦点が当てられており、複数言語によるナラティブの比較は行われていない。そこで、本稿では上記の先行研究に基づきながらも、こうした部分に着目し、調査研究を行う。

3. 調査方法

(1) ナラティブ・データ

本稿では、Minami (2003, 2004) が収集したデータを使用した。被験者は在米の、日英両言語使用可能な6歳から12歳の児童40名(男児17名、女児23名)である。これらの被験者に24枚の絵からなる文字のない絵本「カエルくん、どこにいるの? (*Frog, where are you?*)」(Mayer, 1969) を見せながら、日英各言語で物語ってもらったものを録音し、それを CHILDES (Child Language Data Exchange System) の CHAT (Codes for the Human Analysis of Transcripts) フォーマットに従っ

て書き起こしし、CLAN (Computer Language Analysis) という言語解析プログラムを使用して分析した (MacWhinney and Snow, 1990)。題材として使用した「カエルくん、どこにいるの?」の話の展開は、「主人公の少年と彼の犬がカエルを捕まえるのだが、彼らが眠っている間にカエルは逃げてしまう。そこで、彼らはそのカエルを森の中へ探しにいき、シカやハチなどに遭遇しながら最後はカエルを見つける」というものである。データは日英各言語によるナラティブが各40ずつ、総計80からなる。

(2) コード化

上記のデータに以下の三観点からコード化した。なお、本稿での分析は主人公である「少年」、「少年と犬」(以下「少年(と犬)」)に焦点を当て行った。また、コード化の際、一つの節に一つのコードを付加した。ここでの節とは「一つの動詞が含まれるもの」を意味する。よって、関係詞節も一つの節とみなし、その中にある主語もコード化した。

コード化の第一の観点は「どの登場人物が主語の位置に置かれているかどうか」である。コード化の際、物語の登場人物を「少年」、「少年と犬」、「犬」、「少年と犬が捕まえたカエル」、「カエルの家族」、「その他(ハチやシカなど)」の6グループに分類した。

次に「主語の位置に置かれた各登場人物がどの名詞句で表現されているか」という観点からコード化した。その際、完全な形の名詞句、代名詞句、主語省略の3種類の名詞句に分類した。

さらに、「各登場人物の登場順序」という観点からもコード化した。以下、4種類に分類した登場順序を示す。

① 初登場

登場人物がナラティブ中、初めて主語の位置に言及された場合を初登場とする。なお、主語の位置に初めて出現してはいるが、その前に目的語等の位置で登場している場合は初登場とはならないことを断っておく。

② 2番目の登場

登場人物がナラティブ中にと初登場した後、他の登場人物に主語の位置を取って代わられることなく登場した場合を2番目の登場とする。

③ 再登場

既にナラティブ中に言及された登場人物がいったん他の登場人物に主語の位置を取って代わられた後、再び主語の位置に言及される場合を再登場とする。

④ 継続的登場

2番目の登場、もしくは再登場の後、及びそれ以降にナラティブ中に他の登場人物に主語の位置を取って代わられることなく継続して主語の位置に言及される場合を継続的登場とする。

(3) コードの信頼性

コード化は日本語母語話者2名が行った。付加されたコードがどの程度信頼できるかに関しては、日英各言語で物語られた各40のナラティブの中から無作為抽出された、全体の20%にあたる8名の被験者によるナラティブ・データにより、Cohenのカップ係数を使用して測定した。上述のように、ナラティブには三観点からのコードを付加したわけだが、各観点からのコードについてCohenのカップ係数で信頼性を確認した。その結果、コード化したものの間に「ほぼ完全(0.89以上)」な一致が見られた。

4. 調査結果

本稿で得られた結果は統計処理を通し、主に量的分析を行った。なお、「3. 調査方法」で述べたように、すべての登場人物についてコード化したのが、本稿ではナラティブのトピックと深く関わっている主人公(つまり「少年(と犬)」)に焦点を絞る、結果報告する。

(1) 初登場

「少年(と犬)」がナラティブ中に主語の位置に初めて導入される際、英語でも日本語でも完全な形の名詞句で表現される傾向が見られた。

表 1：再登場での各名詞句における日英両言語間の出現度数による相関（出度数）

		<u>英語</u>	
		完全な形の名詞句	代名詞句
<u>日本語</u>	完全な形の名詞句	0.64*	-0.05
	主語省略	0.22	0.58*

* $p < 0.0001$

また、日英両言語での各名詞句の使用間に相違が見られるかを検証するためにカイ 2 乗検定を行った結果、両言語間に統計的有意差は見られなかった ($\chi^2(1,40) = 0.47, p = 0.49$)。よって、「少年（と犬）」がナラティブ中に初登場する際、英語でも日本語でも同様に完全な形の名詞句で導入される傾向があると言えよう。

(2) 2 番目の登場

2 番目の登場の際、英語では完全な形の名詞句及び代名詞句を伴っての表現、日本語では完全な形の名詞句での表現及び省略される傾向が見られた。また、初登場と同様、両言語の名詞句の使用間に相違が見られるかを検証するため、カイ 2 乗検定を行った結果、両言語間に有意差は見られなかった ($\chi^2(1,40) = 0.08, p = 0.78$)。このことから、2 番目の登場の場合でも日英両言語の各名詞句の使用は類似傾向にあると言えよう。

(3) 再登場

「少年（と犬）」が再登場する際、完全な形の名詞句の使用については英語でも日本語その使用が確認された。また、英語では代名詞句を伴っての表現も見られ、日本語では省略される傾向も見られた。

さらに、「少年（と犬）」がナラティブ中に登場していない間の節数を考慮に入れると両言語においてその節数が多ければ完全な形の名詞句での表現が多い傾向が見られた。逆に、その節数が少なければ、英語では代名詞句で表現され、日本語では省略される傾向が見られた。

以上に示した「少年（と犬）」がナラティブ中に再登場する際の両言語における各名詞句の

使用間に類似が見られるかを検証するため統計処理を行った。まず、日英両言語の完全な形の名詞句の使用数についてカイ 2 乗検定を行った結果、両言語間に統計的有意差は見られなかった ($\chi^2(3,40) = 3.12, p = 0.37$)。一方、英語での代名詞句の使用数、日本語での主語省略の使用数についてカイ 2 乗検定を行ったところ、両言語間に統計的有意差が見られた ($\chi^2(3,40) = 13.93, p < 0.01$) のだが、こうした統計的有意差が見られた理由として、「少年（と犬）」がナラティブに登場していない間の節数が増加するにつれ、英語での代名詞句の使用数が期待値よりもはるかに少なくなり、逆に、日本語での主語省略の使用数が期待値よりもはるかに多いからであることが考えられる。よって、使用割合についてカイ 2 乗検定を行ったところ、英語の代名詞句と日本語の省略の間に統計的有意差は見られなかった ($\chi^2(3,40) = 6.19, p = 0.10$)。したがって、使用全体に対する割合という観点から見ると英語の代名詞句と日本語の主語省略の使用の間に相違は見られず、「少年（と犬）」がナラティブ中に登場していない間の節数が多くなり、距離が大きくなれば、両言語において完全な形の名詞句を伴って表現され、逆に、その節数が少なくなり、距離が小さくなれば、英語では代名詞句を伴って表現され、日本語では省略される傾向が確認できたと言えよう。

さらに、再登場の際、両言語の名詞句の使用間に正の相関が見られるのかを検証するため、統計処理を行った。表 1 は「少年（と犬）」の再登場の際に使用される各名詞句における各言語の出現度数による相関を表したものである。

表 1 が示すように、英語での完全な形の名詞

表2：継続的登場での各名詞句における日英両言語間の出現度数による相関（出度数）

		英語	
		完全な形の名詞句	代名詞句
日本語	完全な形の名詞句	0.42**	-0.38
	主語省略	0.27	0.66*

* $p < 0.01$ ** $p < 0.0001$

句の使用と日本語でのその使用の間に正の相関関係が見られた ($r(38) = 0.64, p < 0.0001$)。また、英語の代名詞句の使用と日本語の主語省略の使用間においても同様に正の相関関係が確認された ($r(38) = 0.58, p < 0.0001$)。

以上の結果から、被験者が英語のナラティブのある箇所でも再登場の言及に完全な形の名詞句で表現すれば、日本語のナラティブの同じ箇所でも完全な形の名詞句を伴って表現することが予測可能となる。同様に、被験者が英語のナラティブのある箇所でも代名詞句を用いて再登場の言及をすれば、日本語のナラティブでは主語を省略することが予測できよう。

(4) 継続的登場

「少年（と犬）」がナラティブ中に継続的に登場する際、英語のナラティブでは代名詞句で表現され、日本語のナラティブでは省略される傾向が見られた。また、英語の代名詞句と日本語の主語省略の使用間に正の相関関係が見られるかを検証するため、再登場の際同様、統計処理を行った。表2は「少年（と犬）」がナラティブ中に継続的に登場する際の各名詞句の使用における英語と日本語の出現度数による相関を示したものである。

上記の表が示すように、英語での完全な形の名詞句の使用と日本語のそれの間に統計的に有意な正の相関関係が見られた ($r(38) = 0.42, p < 0.01$)。同様に英語の代名詞句の使用と日本語の主語省略の使用間にも統計的に有意な正の相関関係が確認された ($r(38) = 0.66, p < 0.0001$)。したがって、継続的登場の際、英語のナラティブで完全な形の名詞句で継続的に言及する話者は、日本語でも同様に表現する

ことが予測できよう。また、英語のナラティブでは代名詞句で表現している話者は、日本語では主語省略することが予測可能となる。

5. まとめと考察

以上、本稿ではトピックがナラティブに導入・維持される際、完全な形の名詞句は英語、日本語のいずれのナラティブにおいてもトピック性の低い登場人物を表現するのに使用されることがわかった。例えば、「少年（と犬）」がナラティブ中に初めて導入される際、日英両言語のナラティブにおいて完全な形の名詞句での言及が見られた。ナラティブに初めて導入される登場人物は「新情報」である。先行研究でも触れたように、Givón (1983), Hinds (1983) も「トピックとして定着していない登場人物は完全な形の名詞句で言及される」と主張する。また、本稿の結果からはナラティブ中に長い間言及されず、再登場する際、英語、日本語いずれのナラティブでも完全な形の名詞句での言及が見られることがわかった。長期間ナラティブ中に言及されていない登場人物は定着したトピックとは言いがたい。この結果も Givón (1983), Hinds (1983) との主張と一致した。

また、トピック性の高い登場人物は、英語のナラティブでは代名詞句を用いて表現され、日本語では省略される傾向にあることが本稿の結果から示された。例えば、「少年（と犬）」が継続的に登場する際、英語のナラティブでは代名詞句、日本語では省略での言及が見られた。継続的に言及される登場人物はナラティブ中のトピックとして定着していると言える。また、いったん他の登場人物に主語の位置を取って代わられるがそれほど節をあげずに再び言及される

際も継続的登場と同様に、英語では代名詞句、日本語では主語省略を伴うことが確認された。これは他の登場人物に主語の位置を取って代わられるまで有していたトピック性は、たとえばいったんナラティブ中に言及されなくとも、即座に再登場する際には失われないからだ、と考えられる。

さらに、本稿では、英語、日本語の完全な形の名詞句の使用間に、また、英語の代名詞句、日本語の主語省略の使用間に統計的に有意な正の相関関係が存在していることが確認できた。つまり、同じ機能を有している名詞句の使用に共通した点が見られたのである。この事実はナラティブでのトピック導入・維持の方法における普遍性を示唆していると言えよう。

もちろん、両言語は構造的、文法的にも相違点を有しており、同じ場面でも異なる言語形式が表層には出現する。例えば、日本語では代名詞句が人物の言及には使用されないが英語ではその使用は頻繁である。一方、英語では文頭の主語省略は文法的に不可能であるが、日本語では適格である。このような制約による言語形式の相違は普遍性ととも言語の固有性をも指し示している、と言えよう。しかしながら、本稿では二言語比較にとどまっているため、今後、対象言語の増加を視野に入れていくことが望まれる。

謝辞：

本稿は筆者が2003年、サンフランシスコ州立大学大学院に提出した修士学位論文の一部を大幅に加筆、修正したものである。データ使用許可を快く与え、また、この論文を執筆するにあたって修士課程を修了して二年以上が過ぎ、もう大学院生でないにも関わらず非常に熱心に指導していただいたサンフランシスコ州立大学の指導教官であった南雅彦教授に心より感謝申

し上げねばならない。また、コード化や分析を行う上で有益な助言を与えてくれた齊藤百恵氏（現スタンフォード大学）にも謝意を表したい。最後に、本プロジェクトは、サンフランシスコ州立大学から南教授に対して授与された Affirmative Action Faculty Development Program Award ならびに Support of Research, Scholarship, and Creative Activity の一貫であることを断っておく。

＜参考文献＞

- Givón, T. (Ed.). (1983). *Topic Continuity in discourse: Quantitative cross-language studies*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hinds, J. (1983). Topic Continuity in Japanese., In T. Givón (Ed.), *Topic Continuity in discourse: Quantitative cross-language studies* (pp. 43-93). Amsterdam: John Benjamins.
- Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?* New York: Dial Press.
- MacWhinney, B., and Snow, C.E. (1990). The Child Language Data Exchange System: *Child language*, 12, 271-96
- Minami, M. (2003). Holding on to a native tongue: Retaining bilingualism for school-age children of Japanese heritage. *International Journal of Educational Policy, Research, and Practice*, 4(2), 39-61.
- Minami, M. (2004). The development of narrative in second language acquisition: Frog stories. *Studies in Language Sciences*, 3, 123-138.
- 中浜優子 (2003) 「第二言語としての日本語の物語発話における指示対象のトピック管理の発達パターン」南雅彦・浅野真紀子編『言語学と日本語教育 III』(pp.77-96) くろしお出版

(投稿受付 2005年10月12日)